

無料塾 放課後校舎に

都内NPO 7月から女川で

女川町の小中学生の3分の1にあたる約200人が放課後に通う塾がある。震災の影響で遅れがちな勉強を教える「女川向学館」。授業料は無料だ。受験を控えた中学生らに勉強を教えるボランティアの中には、地元生まれ育ち、「将来の復興を担う子どもを手助けしたい」と故郷に戻ってきた女性もいる。

(中村守孝)



実家被災の東海さんも活躍

女川向学館は、NPO法人「カタリバ」(東京都、今村久美代表理事)などが女川小の校舎を借りて7月に開設、運営している。町内の児童生徒の多くは津波で家を失い、教材が流された。仮設住宅も手狭で宿題もままならず、勉強する機会が減ったことから、塾講師らを中心に20人程度の態勢で学習環境を提供することになった。

中学3年に個別指導などを行う長期ボランティアの一人、東海栄さん(29)(東京都小平市)は高校に進学するまで女川町で育った。父の春男さん(当時60歳)は石巻市内で働いている最中に津波にのまれ、命を失った。女川港近くの実家も流され、なじみのある港町の光景が一変した。大型連休や夏休みに短期間のがれき撤去などに参加したが、向学館の活動を聞き、「も

っと長期的に復興の道のりを見届けたい」と志願した。勤務先の大手時計メーカーの上司に相談したところ、長期休暇が認められ、10月から加わった。

「地震があったからできなかった、と消極的にならないうでほしい」。同町から仙台市の進学校に進んだ東海さんは、自らの経験を交えながら、「学ぶ気持ちがあれば、どこだって学べる」と熱心に説く。

一足早い冬が訪れつつある教室には暖房がほとんどなく、コートを着込んでの指導が続く。ボランティア期間が受験が終わる来年3月まで。「受験生と笑って春を迎えたい」と東海さんは語る。

暖房費寄付呼びかけ

向学館の運営は寄付に頼っている。現在、暖房に使う灯油に対する寄付を求めている。問い合わせは向学館(080・2820・5558)へ。

受験を控えた中学生に指導する東海さん(左、女川町で)